てるこちゃんとてるみちゃん

だま子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
てるこちゃんとてるみちゃん

【Ｎコード】
Ｎ５７０２Ｃ

【作者名】
だま子

【あらすじ】
同棲している、てることてるみ。二人はゆったりと流れる時間の中、特殊な恋愛の中平凡な毎日を過ごしていた。

てるこの場合

蒸し暑い朝。
ベッド脇に転がっているペットボトルに手を伸ばす。
昨晩冷たかった水も、もう生ぬるいお湯になってる。
横を覗くと、ルミちゃんは、こんなに暑いのに、あたしにひっついて健やかな寝息を立てている。
クーラーの無い部屋で狭いベッドに二人で眠り、快眠を得られる人間なんて、あたしからすると別次元の生き物だ。

「ルミちゃん…今日はルミちゃんが当番だよ」
あたしが声をかけると、まず腕が伸びた。　それから白い足が布団から投げ出され、ルミちゃんはベッドの上で体全体でのびをした。

「オハヨー」

どこか片言なルミちゃんのオハヨーを聞くと、今日も1日が始まるのだと実感する。

「おはよう、ルミちゃん」

「オハヨー、てるちゃん」

もぞもぞと起き上がり、ルミちゃんはもう一度大きなのびをした。
それから、しなやかな体をあたしに向けて、あたしの狭いおでこにキスをした。

「オハヨー、てるちゃん」

2回言うルミちゃんの癖、おでこにキス、これはルミちゃんの朝のスタートだ。

ルミちゃんはパンツ一丁で、お尻をかきながら台所に立つと、グラスに水を注いでくいっと飲んだ。もう一度注いで、今度はあたしに差し出す。

「起きた時すぐ飲む水は体にいいよ」

飲んで、と満面の笑みで差し出す。きっとテレビか何かの影響なんだ。昨日まではそんなこと、してなかった。

ルミちゃんは感化されやすく、それなのに確実に必要なものだけ取り込んでいく。あたしから見れば本当に別次元の生き物なのだ。

「目玉焼きでいい？」

「うん、ケチャップにして」

「はいはーい」

目玉焼きでいい？なんて、ルミちゃんはそれしか作れない。だけど、ルミちゃんの作る目玉焼きは極上で、何度食べても飽きがこない。

トーストもスーパーで買ってきた安いパンなのに、朝食に並ぶ見慣れたメニューはなぜかいつも新鮮に感じる。

「いただきます」

そう言ってルミちゃんは、トーストにあたしお手製ジャムを塗り付け、豪快に頬張った。少し圧倒されてしまう食べ方でも、ルミちゃんはいつもキレイだ。

細身で白くしなやかな体。すらっと伸びる長い手足。

大きな瞳とそれを縁取る長いまつげ。
ブリーチでパサついた短い茶色の髪も、ルミちゃんの美貌の前では、美しく感じてしまう。

「食べないの？」

満面の笑みであたしの顔をのぞき込んでくる。

「そんな顔してたら、ちゅうしちゃうよ」

目の前にいる女は豪快にあははと笑う。

「それは、こっちの台詞だよ、てるちゃん」
そう言って少し真剣な顔をしたルミちゃんはあたしの薄い唇に、自分のふっくらした厚い唇を重ねてきた。

「あまい…」

ルミちゃんの唇に残っていた赤いジャムが、あたしの唇に移った。

「てるちゃんの作るジャムは上等な味がするよ…おいしい」

そう言ったルミちゃんが愛おしくて、あたしは目の前の可愛い生き物にキスをした。

「…だって、ルミちゃんの好みで、あまあまに作ってるもの」

「てるちゃん…」

「な…に…」

ルミちゃんは真っ直ぐあたしを見つめた。ルミちゃんの真っ直ぐな視線は、外すことが罪に感じるくらい、素直で愛情に満ちている。

「だいすきよ」

こうやって一音、一音かみしめるように、気持ちを込めて最上級の言葉をあたしにくれる。

あたしもルミちゃんがだいすきなのだと毎日実感させられてしまう。

あたしはルミちゃんからどうやったって逃げられない。逃げる気なんて、さらさらないけれど。

「ごちそうさまでした」

いつの間にか食事を済ませ、ルミちゃんは洗い物に取りかかっていた。

「てるちゃん今日は仕事？」

お休みです。

ルミちゃんに答えて、あたしも両手を合わせて、ごちそうさまをする。

「じゃあ、散歩に行こうか」

「散歩？」

「うん。ねぇてるちゃん知ってた？この近所に小さい動物園があるんだよ」

「知らなかった…」

本当に驚いたあたしの顔を見たルミちゃんは、小さな子供みたいにカラカラと笑った。

「よし、じゃあ行こうか」

いつの間にか、おにぎりを作ってたルミちゃんは、にかっと音のしそうな笑顔を作った。

そういえば今日は空がよく晴れている。

てるみの場合

昨日の夜、てるちゃんは泥酔して帰ってきた。

「おかえりなさい」

「…ただいま」

玄関をあがるなり、バタンとてるちゃんは倒れた。

「飲みすぎだね」

意識のなくなったてるちゃんに私は話しかけた。狭いワンルームの部屋に、低い声が響く。

私は毎日てるちゃんの帰りを家の中で待っている。

仕事に行くてるちゃんを一日中待ってるのはつらくない。

待ってる時間が長いほど、てるちゃんを愛してると感じたし、てるちゃんに束縛されているようで幸福だ。

実際のてるちゃんは束縛なんか絶対にしないし、私の自由を一番に尊重している。

小柄なてるちゃんの体を持ち上げてベッドに運ぶ。

ベッドに下ろすと、てるちゃんは体を丸めた。

小さな野生動物のように、小さいけれど勇敢な生き物のように、てるちゃんは眠る。その姿がなんとも言えず神々しいものだから、私はいつも泣きたくなる。

上着、ブラウス、スカート、下着、靴下…てるちゃんの着ているものを全部脱がせて、薄い綿のワンピースを着せる。

そうして、てるちゃんの寝る準備を済ませ、私もてるちゃんの横に潜り込む。

少し煙草臭い髪。
汗ばんだ体。
今日もてるちゃんは外で戦ってきた。私を守るために、養うために働いていた。

「おやすみなさい」

私は私の神様を抱き寄せて、頭にキスをした。
明日はどこか散歩しに行こう。てるちゃんの好きな、たらこおにぎりを作って、玄米茶を煎れて、私の神様とどこかに行こう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5702c/

てるこちゃんとてるみちゃん

2011年1月15日02時21分発行